負数計算が生まれた

明治20年頃から、早算と称する簡略計算を書いた珠算書があらわれ始めました。こうした早算を書いた本の中で、田幡利三郎の「早算自在」(明治20年 1887) に負数計算の説明があります。

三桁区切りのそろばんが多くなってきた

江戸時代には梁の上に単位を記したそろばんが使用され、明治になってこの単位に代わって、定位点がわが国の命数法に合わせて四桁区切りにつけられました。しかし、西洋の算用数字が社会一般に普及してくると、それにともなって三桁区切りの定位点をつけたそろばんが多くなってきました。

小学校の算術は必ず筆算でするようになった

明治33年 (1900) に小学校の算術について、「算術ハ筆算ヲ用フベシ。土地ノ情況ニ依リテハ珠算ヲ併セ用フルコトヲ得。」という文部省令が出されました。

貯金局でそろばん競技会がひらかれた

貯金局では、早くから事務処理のためにそろばんを採用していました。そして明治35年 (1902) には、珠算競技大会を開催して珠算の奨励策をとるなど、珠算を重視して局員の計算技能の向上につとめました。

また、算用数字の標準書体を発表して、数字についてもひとつの書体を示しました。